R18
黒猫
催眠
調教

『まさかお前も補習だったとはな』
「先輩と一緒にしないでほしいわね私は少しだけ体育の出席日数が足りないだけだから』
「う…」
「授業もサボった訳じゃないのよ新作ゲーム創作の為に休んだだけよ」
「同じだろ！所でさ…」
『な、何よ？』
『ちょっと顔が赤いよな熱でもあるんじゃないか？』

「ええ、どうも最近体が少し火照っているような気が…」
(何かエロいな)
「でも別に体調が悪いと言う訳でもないのよ」
「そうか、それならいいんだけどな」
「クス
心配してくれてありがとう」
「ん？何か言ったか？」
「いいえ、別に何も言ってないわよ」

「よし、今日はここまでだ五更
水分はしっかり取るようにな」
「はい、先生」
「全く泳がせすぎよ
もうくたくただわ」
ーゴクゴク
（飲み物を用意してくれる
のはありがたいけど）
ーゴクゴク
「これがしばらく続くと
思うと気が滅入るわね」

「でも先輩と一緒に登下校できるのは……んっ」
（また…）
「う……ん……」
（アソコが…熱い…）
「何なのよこれ 今までこんな事なかったのに」
ぐわぁ
ーゴクゴク
（冷たいものを飲んでも火照りが収まらないわ）

「んっ！……ふぅ……」

「これは…参ったわね…
下着が擦れただけで…」

「あっ！……くっ！……」

（どうしようかしら…
家までは我慢できそうにないわ
でもここでは…誰かに見られたら）

「今日は水泳部も休みよね
五分くらいなら…でも…」

「んっ！……あっ！」

（や、やっぱり駄目ね
我慢できないわ
先輩と帰るわけだし
い、一度鎮めないと…）

「うっ！…んっ！…」
「むっ！…くっ！…」
「ふ！…ふぅっ！」
ふぅ
ふぅ
クチュ
クチュ
（学校のロッカールームでオナニーなんて…そうは思うのだけれど）
「あっ！…はっ！…ふぅっ！」
（い、一度始めてしまうとイクまで止めるのは無理！）

「あぁっ！いいっ！」
ークチャッ
「くうっ！はひっ！」
ークチャッ
（声が！抑えられない！）
「はっ！はっ！だ、誰かに！
聞かれちゃうっ！で、でもっ！」
「いいっ！あと少し！もうすぐっ！」
クチュ
クチュ

「イクッ！イクッ！もう駄目！
来るっ！来るわっ！来るうっ！」
「あぁあぁあぁあぁっ」
「乳首いいっ！」
あぁあぁ
ビクン
ーグリッ
「クリトリスでぇッ！イクッ！
イックウうーーーーーっ!!!!」
クチュ
クチュ
くりっ
くうっ

「はあっ！はあっ！はあっ！」
「す、少し声を上げ過ぎたかしら？」
（誰にも聞かれなかったわよね）
ぶる
ぶる
ぶる
ぶる
ぶる
ぶる
「…薬は効いているようだな
そろそろ始めるとしようか」
「催眠調教を…」

「そろそろ五更瑠璃の
催眠調教を本格的に始めよう」
「彼女には補習が始まってから
特殊な媚薬である催淫剤と
いうものをスポーツドリンクに
混ぜて飲ませている」
「服用すると催眠状態に
掛りやすくなり性的な
刺激に敏感になる」

（プールが部活で使えないらしいから助かったわ毎日バカみたいに運動させられたら堪らないものね）
「五更、ちゃんと聞いているか？」
「は、はい聞いています」
「そうか、ならいいが教室内の授業とはいえ今日は特に暑いからな水分の補給はちゃんとするんだぞ」
「はい」
「室内でも熱中症で倒れる事はあるからな」
（気を使ってくれるのはありがたいのだけれど…）

ーゴクゴク
（これ、味がイマイチなのよね）
（でも冷たいものはありがたいわ
体の火照りもまだ続いているし）
ーゴクゴク
（あれ？でもそういえばこの火照り
補習が始まってから…気のせ…！）

「な、何!?」
ードクンッ
(急に眩暈が……あ……ぁ……)
「おい、どうかしたか五更」
「……」
「どうやら催眠状態に
はいったようだな」
「さて五更…お前をこれから
楽しい夢の世界へ案内してやろう」

「いやぁぁぁー!!」
『ククク、叫ンデモ無駄ダゾ人間…』
「あぁ…誰か…」
『助ケヲ求メテモ無駄ダト…』
ーコツツ
『…貴様…何者ダ…』

「ふ…低級な魔物風情に名乗る名などないわね」
「タダノ人間デハナイヨウダナ…」
「あら、その程度の事はわかるのねそこのあなた…早く逃げなさい」
「は、はい！」
「アノ女ヨリモオ前ノカガヒヨソウダ…クク」
「食べられるかしらね…」の私を」

「転身!!」
ーカッ
ーギュウン

「キ、貴様マサカ！
ダークガード!!」
「あら？あなたの様な低級な
魔物でも知っているのね
ご褒美に私の名前を教えて
あげるわ…」
「私はブラックローズ
闇と戦う定めの者」

「アークブレイド!!」
ーザンッ
「ギャアアアアアー!!」
「滅びなさい、悪しきものよ」

「私はブラックローズ
闇と戦う定めの者」
「五更、お前が考えたゲームの
設定を使わせてもらったよ」
「催眠は本人が日頃から
妄想しているものの方が
誘いやすいからな」
滅びなさい
悪しきものよ
『ふふ、他愛もないわね』
「くく、楽しそうで何よりだが」
「そろそろ本題に入ろうかな」

「なっ!?」
!?
ーバッ
「くく、油断したな」
「く…もう一匹地面の中にいたのね」
「くっ!」
(まずいわね、振り解けない)

「う…く…いい、いい加減になさい！」
「暴れても無駄だよ」
ふっ
「はんっ!!!っく！あっ!!」
「ちょ、ちょっと!!
何処を触って!!」
くちゅ
「くく、ここはどうかな？」
「あはぁんっ!!」

「うう…」
「いい様だな ブラックローズ」
「く…」
ビリ ビリ
レベ…
（駄目！全く身動き出来ないわ！）
（どうにかしないと このままじゃ…）

「そうら丸見えだぞ」
「っっ！」
「ふふ、綺麗な色だ
まだ処女かな？」
ズズ
!?
ドリィィ
ダメっ
「だ、黙りなさい！
触手ごときが！」
「これからその触手
ごときに犯されるのだよ」
「私はダークガードなのよ
闇と戦う事が私の使命
どんな目にあっても……え？」
（ちょ、ちょっと！まさか！
そ、それを入れるの!?）

「ま、待ちなさい！入る訳ないでしょ！絶対無理よ！そんな太いものは！」
ズーズンッ
ズンッッ
プチ
プチ
ビクン
なにこれ
ビクン
「いっ!?」
「くく、入ったようだぞやはり処女だったか」
「いっ、いやあああああーーーー!!!」

「あっ！……ひっ！
くっ！……んっ！」
「くく、そろそろ
感じてきたか？」
ビクッ
ぐちゃ
ぐちゃ
ぐちゃ
ぐちゃ
ぐちゃ
ぐちゃ
ゴリッ
「気持ちいいのだろう？」
「ふ、ふざけた事を
いわないで！
犯されて感じる
訳がないひいっ!!」
（な、何!?今何か!?）
「ここがいいのか？」
ーゴリッ
ビクッ!!
「いいっひいいいいいいーーーーー!!!」

「はひっ！はひっ！」
「少しイッたようだな」
ゴポッ
ゴポッ
ギシッ
ギシッ
ぬぬっ
「だ、誰が！私はイッてなんか…！」
（な、何？膨らんで…まさか！ウソでしょ！）
「くくく…」
「い、嫌よ!!中で出す気なの!?駄目よ！駄目！絶対駄目よ！」

「中は駄目ええ
ええーーーー!!!」
ドボッ
ビカッ
(熱いっ!お腹がっ!
子宮があついっ!)
「いひいっ!あいいっ!」
「くく、またイッたな」
「ひがうっー!
イッてなひいっ!
中出しされて
イッてないっ!」

「あ…あぁ…」
ーゴポッ
「…う…うう…」
プル
プル
プル
ズルリ
ズルリ
ポタ
ポタ
『中出しされてイッた気分はどうだ？』
「うう…私は…イッてない…」
《負けないわよ…私はこんな事で…》
「くく…まだ余裕があるようだな…続けるとしよう」
「やっやめなさいっ！もうこれ以上はっ！あっ！ひいいーーっ！」

「止めなさいっ！いやぁっ！
もう無理よっ！これ以上はぁ！」

ガンガン

あぁぁぁぁぁぁッ

はひっ

「あひいっ！はひっ！
そこはだめぇっ！」

はひっ

「駄目？本当は
気持ちいいのだろう？」

「しょ！しょんな
事なひいっ！」

はひっ

「ほうらまた触手が
オマンコに入って来たぞ」

「いひいいいいーーーーーッ
もう入ってこないでえっ!!」

ガンガン

じわぁ

ガンガン

「あはぁっ！……ひいっ！おねがっ！……もうっ…」
「ふむ、催眠の掛り具合は問題ないな」
はッ
「これなら補習中に仕上げられそうだ」
「はひっ！はひっ！」
「今日はここまでにしておこう さぁ、目を覚ますんだ五更… お前は今教室で授業中だぞ」
「…教室？…授業 …はっ!?わっ私!!!」
「ん？どうした五更 授業中に居眠りか？」
「い、いえ！その…」
「まぁいい、今日はもう帰っていいぞ」
「は、はい…」
はっ
はっ

ーガタン
「えっ!?」
(な、何?…あ、足が…)
「はっ!はっ!こ、これって!」
ぶる
ぶる
ぶる
ぶる
ぶる
!?
!?
(か、体に力が入らないわ)
「どうかしたのか?五更」
「い、いえ!な、何でもありません。」
(う、ウソでしょ!あんな夢を見たからってこんな事…)

「どうした五更？気分でも悪いのか？」
ーポン
「ひいっ！」
（か、肩に触れられただけで!?）
（な、何なの!?まるで全身が…）
ビクッ
「おい、聞いているのか？」
「はひいっ！だ、大丈夫れす！だ、だから手をのけてくらさい」
「んん？何だって？」
ーグイッ
「ほへいいいいいいいーーーーー!!!いぎゅう!!て！て！てをはなひてえーーーくらしゃひいー!!」

あぁぁぁぁぁぁ
「はふうっ！はふうっ！はふうっ！はふうっ！」
「本当に大丈夫なんだな？」
「は、はいい！だ、大丈夫れすから私の事には構わずに行ってくらさい」
「そうか、ならいいがだが最近のお前は少したるんでいるぞ補習でも気を抜くなよ」
ピクッ
ピクッ
ピクッ
ーパンツ
「つおひいいいいーーりいひいっ!!」
（いいーっ！イッたあっ!!今わたひっイッたあっ！）

「くうふぅう……ふぅ……」
「はっ！はっ！じょ、女子生徒のお尻を叩くなんて…はっ！はっ！セクハラよ！全く！……はふぅ！」
「最近体が火照っていたけれどこんな事は初めてね…いくらあんな夢を見たからって」
はあッ
はあッ
ぶる
ぶる
ぶる
ぶる
ービクッ
「んくっ！」
「ちょっと犯された夢を思い出して感じるなんてまるで私へんん…」
「…」
（そんな訳ないでしょ…そんな訳…）

『遅くなってごめんなさい』
『気にするなって』
「補習が少し伸びてしまって」
「結構厳しい先生らしいな」
「そうなのよね今年からうちの高校に赴任してきたらしいんだけどでも色々気を使ってもくれるからいい先生だと思うわよ」
「そうか」
「暑いからって飲み物も用意してくれるし」
「へぇ、それはありがたいな」
「あんまりおいしくはないけれどね」

「それじゃまた明日な」
「ええ、さよなら…」
「ふぅ、変に思われなかったわよね」
「下着が濡れて気持ち悪いわ早く帰って着替えないと駄目ねそれにしても授業中に寝ぼけるなんて…」
「それもあんな夢を見るなんて触手にイかされるなんて最悪よエロゲー制作に熱を入れすぎなのかしら…だからあんな夢…」
「もういいわ忘れましょう」
「でも体の火照りは気になるわね…一度病院に行った方がいいのかしら?」
「ふぅ…」
「気持ち良くなんて…なかったわよ…全然…」

「それで今日はどうされたのかしら？」

「それが…」

「その…体が熱いというか…妙に火照るというか…」
「いつから？」
「一週間くらい前からかしら」
「他には何かある？気分が悪いとか、吐き気とか」
「特にそう言う事はないわでも…突然ねむくなったり変な夢を…見てしまったり」
「どんな夢？」
「そ、その…ええと…い、イヤらしい夢というか」
「そう、でも思春期の若者には良くあることよ」
「（そうなのかしら？）でも他にもその…感じやすいというか」
「多分自律神経の問題だと思うわ最近暑いから体調を崩す人が結構多いのよとりあえずお薬を三日分出しておくから食後に飲んでね」
「わかったわ…」

「沙織、私だけど…」
「黒猫氏でござるか何用でしょうか？」
「あなたに紹介してもらった病院に行って来たわ」
「そうでしたかそれでどうだったでござる？」
「自律神経がどうとか、まぁ大した事じゃないみたい」
「それは良かったでござるな」
「ええ、あの、それと」
「わかっているでござるよきりりん氏や京介氏には黙っているでござる」
「そう、ありがとう」

『五更……』

『誰よ？』

『五更……璃……』

『うるさいわねぇ、誰なのよ？』

『お前は今ブラックローズだ』

『はぁ？何を言っているのよ
ブラックローズってそれは
私が作ったゲームのキャラ
じゃないの……』

『お前は今ブラックローズだ
触手に囚われて動けない』

『触手に……囚われ……』

「はっ!?」

「くく、ようやくお目覚めか
この状況で居眠りとはな」

(くっ!そうだったわ
私は油断して触手に
捕えられていたんだわ)

ギシッ

ギシッ

グイグイ

「くっ!このっ!」

「無駄だよ…」

「わ、私を誰だと
思っているの!
私はダーク…
な、何よそれ!」

あぁぁ
ーグイッ
「くくく、綺麗な色だ
まだ処女なのか？」
「まっ！まさか！駄目！
駄目よ！絶対駄目っ！
それだけは絶対にっ!!」
ーズンッ
「いやあああ
ああああーーっ!!!」
ズンッ

「いっ！ぎっ！んっ！んっ!?」
「どうだ？気持ちいいか？」
「よっ！良くなんてないわっ！よっ！」
「そうかアナルを責めないと物足りないか」
ぐぐぐ
ずぽッ
ずぽ、ずぽ、ずぽ、ずぽ、
「え!?ちょっ！」
(ア、アナルってお尻のあ…)
ーズッ
「っひいいいーーっ!!あっなっるぅーーっ!!」
「これが欲しかったんだろう？」
「ちっ！ちっ！がっふひいっ!!」

ビクッ

「いっ！ひっ！ふ！へひっ！」

ごぼッ ぎッ ぎッ

「くく、アナルで感じているな」

「気持ち良くなんてないっ！良くなんてないわよっ！」

「そろそろ黙ろうか」

ぢゅぽ ぢゅぽ ぢゅぽ ぢゅぽ

「むごっ!!」

「ふふ、乳首も寂しそうだな」

「!?ふごっ！やべてっ！ぢっぢぐびはだべっ！」

ーグイッ

「いぎひいいいいいいいいーーーーーっ!!!」

「いぎっ！ごぼっ！いだいっ！やめっ！」
「痛いか？だがその痛みもお前なら気持ちいいはずだぞ」
ビクッ
「ぎっ！ひいっ！ふへぇっ！何で！痛いはずなのに！痛いのにっ！気持ちいい!?」
「お前は変態なんだよ、五更」
「ひっ！ぎっ！ち、ちがっうっ!!」
ビクッ
「違わんなその証拠にもうイキそう何だろう？」
「ふひいっ！おふっ！しょんなこと！なひいっ！ひいいっ！」
「さぁイけ！犯されてイクんだ！」
「だめっ！だめっ！イグッ！いぐっ！犯されてイッぐぅーーーーっ!!!」
ビクッ

あぁぁぁぁぁ
「へはぁぁ…ふひぃ……ぃ……」
『二度目の処女喪失はどうだった？気持ち良かっただろう…なぁ五更』
「はひ…ひぃ…ぃ…」
「まだまだ味わって貰うぞ無限に続く処女喪失をな」
ガク
ガク
ガク
コポッ

「うう！……う……」
「そうだ、ようくこの玉を見つめるんだ…」
「ふむ、かなり深い催眠状態にまで導けたようだな」
「もうしばらく夢の中で触手に処女を奪われ続けてもらおうかな」
「くう…は、離しなさい！触手ごときが！」
「その触手が処女膜を破ってお前のオマンコに入って来たぞ」
「いぎひいっ！やめなさいいっ！」
はあッ
はあッ
ぶる
ぶる
ぶる

「……う……う……」
「どうだね？満足できたかな？」
「ま、満足…ですって…こんな…事されて…するわけないでしょ」
「そうかな？気持ち良かったのではないかね？」
プル
プル
プル
は！
は！
ゴボッ
「き…気持ちよ…くなん…て」
「私はお前の為にしてあげているんだよ変態のお前はこうしないと満足できないだろうからな」
「だ…だれ…が…変態よ…」
「まだ元気なようだ続けられそうだな」

「ひいっ!?うそおっ!!みっみいっ!?いっ!」
「この穴でもお前ならイケるだろう?」
「そ、そんな訳!なはっひいー!!」
「そんな訳あるだろうもうイキそうじゃないか」
ビクン
ぐりゅ
ビクン
やめっ
「はひいっ!…あんうっ!!!うひいいー!!んっ!へうっ!…あはうっ!!」
「さあ、耳の穴を犯されてイけ」
「いっやはあっ!!いひっいっ!!!」

「イグッ！イグッ!!
耳の穴犯されて
いっぐううぅぅー
ーーーうっ!!!」
「あああ
ううううっ!!」
ビクンビクン
イッ
イッ
「耳の穴を犯されてイッたな？」
「っひ、ひがうぅっ！
イってなひいいっ！」
「そうか？なら続けよう」
「ほへいいっ!!やめへぇ！
イッたからぁ!!イッた!!
イッたからやめへぇー!!!」

「う…ひぃ……ぐぅ……う……」

『……』

ぷる

ぷる

ぷる

ぷる

ジュボ

はっ
はっ
ギシッ
ギシッ
「くく、もう認めたらどうだ
お前は犯されて感じる
変態だと言う事をな…」
『ち…がう…わ！
私は…変態じゃ…ない』
「違うものか
犯されて何度も
イッたじゃないか」
「うう…イ、イってないわよ
私はイってない…イって…ない」
「思ったよりも強情だな…」

イッ
イッ
イッ
イッ
ビカーン
ビカーン
「私は…イってな…」
「そう言うならこの電マで
クリトリスを刺激してやろう
大好きだろうクリトリスは」
「や…め…」
ービィイイイッ
「いっひいいいいーーッ!!」
「どうだイッたか?
もっと強いのがいいか?」
ービィイイイッ
ビカーン
「ういいいいったあっ!もうイッだがらっ!
イッだがらあっ!やめてええええーーーーッ!!」
グリッ
グリッ

「くく、最初からそう素直に言えばいいんだ」
「さぁ、目を覚ますんだ五更…」
!?
「あっ！わ、私！」
は―
は―
「そろそろ休憩は終わりだぞ、五更」
（私またあんな夢を…）
「大分疲れているようだな」
「え、あの…そ、そんな事は…」
「仕方ない、今日はもう帰っていいぞ」
「…はい…」
（どうしてあんな夢を見るのよ…どうして…）

『はぁ！……はぁ！……』
「またあんな夢を……触手に何度も何度もっ!?」
「つくふぅつ！」
（だ、駄目！夢の事を思い出しただけで体が反応して…）
『はぁ！……ふぅっ！……ぅ…』
ぶる
ぶる
ぶる
「夢を見ただけでこんなになるかしら？大体貰った薬も全然効いてないわよね」
ーバタン
「！……あら？誰もいない？今確かにドアが閉まる音が…気のせい…みたいね……ふぅ…」
「早く着替えたいけどまだ体が…」

ーヴヴヴ
(!携帯…先輩からだわ)
「もう補習終わったよな?」
「ご、御免なさい ちょっと疲れて 休んでいたのよ」
「そうか、かなり 泳がされたんだな」
「え、ええ、ホントに 嫌になるわよ」
(絶対に言えないわよ イヤらしい夢を見て 疲労困憊だなんて …そんな事…)
!?
「嘘はいかんな」
「!ひやうっ!」
「どうかしたか!」
「え!あ!な、何でもないの! 大丈夫だから(な、何、今の?)」
ビクッ

（くく…気のせいではないぞ五更）
「俺は見えない何処にもいない…」
「だから先輩、悪いのだけれどもう少し部室で待っていて…」
さわ
「！はひやうっ!?」
「!?黒猫！」
ツーっ
（な、なんなの!?誰かに触られているみたいに体が!?）
イッ
ビクッ
ビクッ
あっ
「ご、御免なさい！なんでもないひいっ！」
「大丈夫か？声が変だけど？」
「ひょっ！ひょんあ事なひとお！思うわよおっ！あひやあっひっ！」

（今の五更に俺の姿は見えていない）
（より正確に言えば見えているが認識は出来ないと言う事だが）
（さてそろそろアナルかお前も期待しているのだろう？）
ーグリッ
「ほひいいっーっ!!!」
「黒猫！大丈夫か！何かあったのか！」
クンクン
おほぅッ
「耳もどうだ五更？」
「ら！らいじょうぶよぉ！ほ、ホントひらんでもらいんだからねひいっ！」
（ほら五更、頑張らないと大好きな先輩に変に思われるぞ）
「ふっ！ふぅうっ！はっ！……はっ！……（何とかごまかさないと！先輩にばれてしまうわよ！）」
ぐりッ

「お前やっぱり変だぞ
何かあるなら今から俺が…」
「あの、実は少し
風邪気味らしいのよ
無理して補習に出た
からちょと体調が…」
「そうか、通りで
が変だと思ったよ」
(ふふ、頑張るな、今日はもう
精神的にも肉体的にも限界
なはずなのにな)
ぶる
ぶる
ぶる
キャう
はあッ
はあッ
!?
(よほど高坂京介の前で
痴態を演じたくない
らしい、そう言う事なら)
「ええ、だから…いいっ!?」
「?どうかしたのか?」
「あ!あの!ちょっと!その!
(な、何で!?急にオシッコが!!)」

「くっ！ひっ！んっ！うっ！
（ウソでしょ！突然こんな！）」
「！おい！どうかしたのか！」
「ひい……い……ひい……い……っ
（だ、駄目！我慢できない！
で、でも今電話を切ったら！
絶対変に思われるわ！
何とかごまかさないと！）」
『気分悪いのか！
ちょっと待ってろ
直ぐに俺が行くから
ロッカールームだろ？』
「ちょっ！ちょっと待って！
（だ、駄目！今の私を先輩
に見られるなんて!!
ど、どうすれば！）」
「漏らせばいい」
ぐんっ
ーパンッ
「いぎひいっ!!!」
ビクッ

（何!?何!?何なのよおっ!?
お尻がっ!!おひりいっ!!）
ーパンッ!パンッ!
「あっひぁ!ひゃぁっあっ!
（もっ漏れるぅーーー!!）」
「いっひいやぁは
ぁぁぁぁーーー!!!
でっでちゃったぁは
ぁぁぁぁーーっ!!!」
「何が出たんだ!」
パンパンッ!
ぎゅぅぅ
ビクンッ!!
「!おい!黒猫!
返事しろ黒猫!」
「胸も揉んでやろう」
ーぎゅう
おぉぉぅぅ!!
「おううっ!おっぱ!ぁいっ!
（なっんでっ!?いっ痛いのにっ!
恥ずかしいのにっ!何でっ!?
気持ちいいのよおーーーっ!!）」

「ふぅっ！ふぅっ！はぁっ！いひっ！
（おっ落ち着いてっ！ご、ごまかっ！
さなひいっとっ！せんばいがっ！
きちゃうぅっ！）」
「待ってろ黒猫！
もうすぐ着くから！」
「まっ！待って先輩！
私今裸なのよ！」
「えっ⁉」
「今大声を出したのはその
ゴ、ゴキブリが出たの
それでびっくりして…」
（うぅ～！何で？
きもひいいのお？）
ぶる
ぶる
ぶる
ぶる
シャァァ
はぁぁぁぁ♡
ぶる
は
は
「な、何だ！そうかよ
もうドアの前まで
来てたよ、危なかったな」
「そ、そう、でも私は人間の男に
裸を見られても平気だけれど
（助かったわ…ああ…でも私
今お漏らししながら会話してる
オシッコを洩らしながら先輩と…
こんな姿見られたら死ぬわよ）」
（こちらも助かったな
ドアを開けられて目撃されたら
まずかった、だが、危険を冒した
だけの効果は確実にあったようだ）

「さっきは騒がせてしまって御免なさいね」
「気にするなよ」
「所でゲームの方はどうかしら？今度はこそいけると思うのだけれど」
「うーむ…」
「何よ、つまらないの？」
「まだ始めたばかりだろ少し落ち着けよ」
「そういえばあなたの妹は最近どう？補習とかゲーム制作で忙しくてあっていないのだけれど、元気かしら？」
「元気だよ、相変わらずエロゲー三昧だけど」
「そう、ならいいけど」
「あんまり良くないけどな」

「この部屋少し暑いわね」
「だな、でも仕方ねえよ
今日の気温は30度超えて
いるみたいだしな」
「そう…ね(まずいわね…
また体が火照ってきたわ)」
(く!…う)
(す、少しだけなら
…大丈夫よね)
カチャ
カチャ
ん♡
ふ
ゴ
「ふーむ…」
(あ!…く!…
ふう……ん!)
「やっぱり設定が
複雑じゃないか?」
「そ!そんなことお!
なひいと思うけどっ
(あひいっ!だ、駄目っ!
や、止めないとっ!)」

「いや、でも前はそれで失敗してるからなぁ」
「う、うるさひいわね！設定はかえなひわよっ！（いひっ！あはっ！く！せ、先輩が横にいるのにっ！これ以上はもう！でも！でも！まだイってない！もう少し！もう少しだけ！）」
「そう怒鳴るなよ、前作よりは色々進歩してるとは思うぜ」
「そ、そう…（直接触れないとでも…バレたら…ああ、そう思うと余計に…く…）」
はあッ
プル
プル
プル
イッ♡
「くぅ！…（いい！これよ！この刺激じゃないと！）」
「ん？どうかしたか？」
「え!? い、いいえ!! な、何でもないわよっ！す、少し疲れていて眠いだけだからっ！」
「ふうん、ならいいけど。」

（んっ！くうっ！はひいっ！あんっ！
は、早くイかないとっ！先輩にっ！
気づかれちゃうからっ！）
「やっぱりもう少し設定を
わかりやすくした方がいいな」
（駄目っ！だめっ！イケないっ！
やっぱりクリだけじゃだめっ！
アナルもっ！でもここじゃっ！）
「聞いてるか？」
「はひいっ!?（手！てえっ！
せんぱひいのてえっがっ！
き！きもひいいーーっ！）」
ビクッ
ビクッ
ビクッ
!?
「うわ！何だよ！
びっくりさせるなよ」
「ご、ごめんなひゃい！
ちょっとウトウトして
ひゃから！」
「いいけど、大分疲れて
るみたいだな」
「へ、平気だから
ゲ、ゲームを続けて…」

「ふぅつ！ふぅつ！」
（ちょ、ちょっとイッてしまったわよ…）
（ああ…でも全然駄目！もっと本気でイかないと）
「設定は難解だけどエロシーンはいいな」
ーグリッ
ぐりっ
ぐりっ
（ク！クリイイッ！）
「しょ、しょうでしょ！け、結構力がはいっているからはぁっあっ！」
「でも横にこれを考えたヤツがいると思うとな…」
「ふっ！ふふっ！な、何よ!!ひょっとして興奮しちゃうのかしら！兄さんはぁあっ！」
「ば、馬鹿言うなよあとと兄さんは止めろって」
はぁ、はぁ、
はぁ、はぁ、

（駄目なのはわかっているのよ
で、でもこれをアナルに…）

ーじゅぶっ

（おっほほぅっ！いひぃっ！
やっぱりアナルなのよっ！
ここがすごいいのよっ！）

（ふぅっ！ふぅっ！夢で
アナルを犯されてから
オナニーで弄るのが
癖になってしまったわ）

「うーん、やっぱり
エロはいいな
絵もかなり上手い
とおもうぜ」

プル

じゅぷ
じゅぷ

「そっ！そう！ありがと！
せ、先輩はどういうのが
好きなのかしら！」

「え？どういうのって
言われてもなぁ」

プル

「た、例えばオナニー
している女の事とか！
そ、そういうのは
どう思うのかしらね！」

「そ、それは…まぁ、
き、嫌いじゃないけど」

くぅ…

プル

「しょ！しょうなんらはひっ！」

「ふうっ！ふうっ！
（こ、ここまできたら
イクまで止めない
わよっ！絶対っ！）」

「あ、あくまで
ゲームの話
だからな」

「ほ、ほかにはないのっ！
た、例えば！その！あ！
アナルとかはどうなの！」

「ええ!?ア、アナルって
尻の穴だろ？
それはゲームでも
ないかなぁ」

プル

は！

は！

プル

プル

「しょ、しょうなのっ！」

（そ、そんな事言わないで
頂戴！しゅっ！しゅごい
いいのよおっ！ほんろに
いいのよっ！
自分でも引いちゃうけど
きもひいいのよおーーっ！）

「ふ、ふふ！だったら私が声を
出してあげようかしらね
あ、喘ぎ声には自信があるのよ」

「どんな自信だよ
まぁ聞いてみたいけど」

「じゃ、じゃあいくわよ！あはっ！いいっ！そこっ！気持ちいいわよっ！あっ！んひいっ！そこはらめえっ！」
「へぇ、確かに結構上手いなエロゲの声優として食っていけるかもしれないぜ」
「はひいっ！あぅ！あ、ありがとっ！いひいっ！」
「もういくわっ！イクッ！イクっ！見てえっ！先輩っ！私っわたしいっ！イッちゃうううううーーーーっ!!!」
プシャッ
ハァハァ
「はぁ！はぁ！はぁ！どうかしら私の演技」
「ああ、かなり凄かったな演技とは思えなかったぜ」
「で、でしょうね！先輩が聞きたいのならまた聞かせてあげてもいいのよ」
「そ、そうだなまた今度…な」
「ええ…また今度…（今度また先輩の前で…オナニーしたい…凄いよかったもの…先輩の横でアナルを弄りながらイクのはたまらない…たまらないのよ…）」
エオッ♡

「貰った薬は全然効果がない様なのだけれど」
「また夢を見たの？」
「夢どころじゃないわよ」
「何があったのかしら？」
「そ…それは…」

「なるほど夢ではなく現実でね…」
「ええ、誰かに触られるような感覚をハッキリと感じたわ」
「オナニーは週に何回しているの？」
「は!?」
「い、いきなり何を聞くのよ！」
「これも治療に必要な事だから正直に話してね」
「前は週に一回くらいだったけど…最近は…その…ま、毎日…かしら…ね」
「それでも性衝動を抑えれないのね」
「だから困っているのよ」
「オナニーのやり方に問題があるのかもしれないわね」
「オナニーのやり方？」
「いつもはどういう風にしているの？」

「そ、それは…」
「ちゃんと答えてね」
「ク、クリトリスとか…乳首とかを弄って…（うう…何でこんな事言わなきゃならないのよ）」
「オマンコには何も入れないの？」
「え、ええ…」
「アナルは？」
「は!?な、何を言って！」
「クス、その慌てよう使っているみたいね」
「う…す、少しだけよ！」
「ある程度問題点はわかったわね」
「え!?本当なの？」
「ええ、あなたはオナニーのやり方が下手なのよ」
「オナニーが下手…」

「オナニーのやり方が下手で
自分の性的欲求を満たせていない」

「それがストレスとなって
変な夢を見たり感覚異常が
起こったりするのよ」

「確かエロゲーの制作
をしているのよね
それも原因かも
しれないわね…」

「どういう事？」

「色々妄想するけれど
それを解消する手段がない
だから自分をゲームのキャラ
に置き換えて夢でその衝動を
発散しようとしたりするのよ」

「どうすればいいの？」

「オナニーのやり方を変えて
自分の性衝動を満足出来る
ようにした方がいいわね」

「アナルを開発しましょう」

「はぁっ!? 何を！」

「だってオマンコの方は
使いたくないんでしょ
だったらアナルを使う
しかないじゃない」

「う…う…そ…んな事…」

「そのまま足を抱えててね」
「こ、こんな事が本当に治療に必要なの？」
「ええ、だってオマンコの方は使いたくないんでしょ？だったらアナルを使って中イキするしかないじゃないの」
「中イキ…」
「あなたの体はクリイキじゃ満足できないのよ」
「す、少し試すだけよ」

「ちょっと冷たいわよ」
「んんっ！」
「滑りを良くする為だから我慢してね」
「ふ…ぅ…」
「それじゃ指を入れるわね」
「え、ええ…」
トロ―…
クチュクチュ
ぶる
あと
ぶる
「あ！…んぅ！…ふぅ…」
「どお？痛くない？」
「え、ええ…だ、大丈夫よ…」
「あふうっ！」

「大丈夫みたいね
感じはどうかしら？」

「…わ、悪くはない…と思うわ」

「気持ちいい？」

「気持ちいいという
ほどではないわね
くすぐったいというか
…それだけよ」

「クス、慌てないで
まだこれからが本番よ」

ピト

「本番？」

「それじゃ一気に
奥まで行くわね」

「は？」

「あっひゃひいいいいいいいいいーーーっ!!」
ずぶっ
「あら御免なさい
痛かったかしら?」
「い、痛くはない!
痛くはないのよ!
で、でも無理!
無理なの!無理!」
「続けるわね」
ぃぃぃ
ーじゅぷ
ーじゅぽっ
「あひいっ!いあぁっ!
ちょっ!ちょっとまっ!
まってちょうだいひいっ!!」

「グリグリしてあげるわね」
ーグリグリ
「ほげえっーーっ!!
だっだめえっーっ!!
そりえはらめえっ!!」
「そんなこと言って
大好きでしょコレ」
「うひいっ!!
だめよおっ!
だめなのよお
ーーーっ!!」
ビクッ
ビクッ
ぐりゅんッ
ぐりゅんッ
「何が駄目なの?」
「だめなトコに
当たってるうっ!
そこは触れちゃ
だめなのよおっ!!」
「ふふふ、イキそうなのね
中をグリグリされて」
「イグウッ!イグウッ!
中でイグウッ!あひっ!
お尻の穴グリグリ
されていぐうっ!!
だめなのにいーーーー!
イッちゃうーーーっ!!!」

「ふゅう…ふゅう…」
「満足したみたいね
だらしない顔して」
「…も……ら…めぇ
……お…ね…ふぁ」
「まだまだ終わらないわよ」
「…う……う…」
プル
プル
プル
は！
は！
うう…

「それじゃ続けましょう」
「い、いれて本当に治療に必要なの…ちょ、ちょっと何よそれ！なんなの！」
「導入のアナルビーズよ！これを今からあなたのアナルにぶちこむのよ」
「は、馬鹿な事言わないで！無理に決まっているでしょ！」
「今のあなたなら手首ごとそっくりと全部飲み込んだ！」
「太さが違こうやない！」
「少しだけね」
「す、少しじゃ…」
「大丈夫だから ほらお尻上げて」
「うう…い、いったい？」
「そうそう いい子ね それじゃいくわよ」

「あっ！ぐううっ！ひいっ！ううっ！」
「ほら力を抜いて」
ぶるっ
「ああっ！むっむりっ！これやっぱり無理よっ！」
『平気よ、だから力を抜いて』
「ふううっ！はぁひいっ！」
「そうそういいわよ」
「うううっ！はぁはぁっ！はいって！きいたあっ！」
『ほーら、一個入ったわ』
ぐぬぬっ
「はひっ！はひっ！もっ！もう！もう止めて！これ以上はっ！」
「何言っているのよ まだまだこれからよ」

「んううんう！」
「頑張ったわね」
「はひっ！うひいっ！く、苦しひいはあっ！」
「我慢よ、我慢、我慢した分気持ち良くなるからね」
「もっ！もう無理！限界！限界よっ！」
「そう、なら出していいわよ」
「だ！出していいって！」
「自分で出すのよ簡単でしょ？」
「そっ！そんな！無茶を言わないで頂戴よっ！」
「自分で出せるようにならないと仕方ないでしょ」
「そんなはあっ！」
プル
プル
プル

ぶる
「ほら、もっとふんばる」
「ういいいいーーっ！」
ぶるぶる
「そうそう、いいわよ」
「はひいっ！あひいっ！
でっ！でてきてよっ！」
ぶるぶる
は！
は！
「ふふ、来たわよ」
「ひうぅっ！ふぅっ！」
「そうそう、その調子」
「くううっ！」
「気持ちいいでしょう？」
くぬぬ…
「うぅ…そんな…うはあっ！」
「さぁ！もっと力を入れて！」
「あぁはあああっ！」

ぬぬぬ
「いいわよっ！その調子！」
「あぁぁぁはぁっ！きったぁはぁぁっ！」
「そうそう、いいわっ！」
「ヒィイッ！イグゥッ お尻から出て来てっ！ イクぅーーーーっ！」
「でたわっ！」
「はぁひぃぃぃぃぃぃぃぃーーーーーーーーっ!!!」
ぬぬぬぬんッ
ビグッ
ゴリ
ゴリ

ぶる
ぶる
ぶる
ぶる
は！
は！
セク
セク
「ふふ、でたわねぇ」
「はひっ！ふひっ！」
「気持ち良かったでしょ」
「うう…よ、よかった！
すごく良かったわっ！」
「アナルがぱっくり開いて
これならオチンチンも
入りそうね」
「オ、オチ…な、何言うのよ」
「オチンチンを出し入れしたら
さぞ気持ちいいでしょうね」
「そっ！そんな事！
ありえないわっ！」
「ふふ、今想像したでしょ
だれのモノを咥えこんだ
のかしらね…」
「や…やめて…もう…」
「クス、苛めすぎたかしらね
今日はこのくらいにしましょ
ひょっとしたらもう治療の
必要はないかもしれないわね」

（あの女医の所でアナルを開発されてからはおかしな夢は見ていないわ）

（やっぱりあの治療で良かったって事？）

（でもオナニーの時にアナルを弄るのが癖になってしまって…）

『よし五更、15分の休憩だ』

『はい…』

「今日はアイスをやろう」
「え？アイスですか？」
「ん？アイスは嫌いか？」
「い、いえ、そう言う訳では
でもいつも飲み物まで
頂いているのにその上…」
「気にするな
本当は俺が食いたいんだよ
だが、補習中に俺だけが
食う訳にもいかないだろ」
「それでは遠慮なく…」
「あ＝待て五更
食べ方を教えてやる」

『はぁ…(アイスの食べ方?)』
「いいか、最初はアイスの先端にキスをするんだ唇で感触を楽しむのさ」
『こ、こうですか?』
「お、おお、いいぞ」
『!あれ?』
「どうかしたか?」
「その…このアイス…ちょっと熱い気が……」
「冷たいからそう感じるんだろう」
「そ、そうですね……」
「さぁ、もう一回最初からだ先端にキスをして……」
ちゅぱ
ちゅぱ

「んむっ！」
「おぅ…」
「はむっ！」
ぅ
ぅ
チュパ
チュパ
『いいか、この棒アイスは絶対に歯を立てるなよ、舐めて溶かすこれが正しい食べ方だ』
「ふぁい…(どうしてアイスの食べ方まで指導されないといけないのかしらでも、おせっかいとはいえ好意でしてくれているわけだし…はぁ、面倒ね)」
「良しそうだ、五更上手いぞ(くく、催眠効果による誤認、五更は俺のモノをアイスだと思っている、向こうで肉体の開発も進んだようだしそろそろ仕上げに入るか)」

「もぐっ！ふぐっ！」
「おぉ！そうだ、奥まで…
そう、上手いぞ五更
お前には才能がある」
「ふぁ…（アイスを舐める才能って何よ
まぁほめられて悪い気はしないけど）」
じゅぶ！
じゅぶ！
「どうだ？美味いか？」
「え、ええ、味は好きですね
（気のせいか全然減らないような…）」
「口の中で転がすように
…むぅ…いいぞ、そうだ」
「もごっ！むっぐっ！（一々うるさいわねえ
そんなにアイスの食べ方に拘りがある訳？）」

「ようし、ここまできたら
一旦外に出して先端を舌で…」
「こ、こうれすか？」
「くぅ……そうだ…それでいい」
レロ
レロ
『はぁ…（何がいいのよ）』
「そう…舌でレロレロする感じだ！」
『（レロレロ？）こ、こんな感じかしら？』
「おぅ！そうだ！」
（何興奮しているのかしらね）

「一気に奥まで飲み込むんだ！」
「むぐうっ!!!」
「喉の奥で味わえ！」
「おぐうっ!!!(く、苦し！)」
「出るぞ！」
ドクッ
「!?(出る!?何が!?)」
「お、おおぅ……」
「むうっ!?(何!?何!?)」
「全部吸いだすんだ！」
ごくっ

「うええ！……な、何ですかこれ？」
「ふぅ…かなり出たな これがこのアイスの 一番美味い所だ」
「うぇ…(何かドロドロして気持ちわるいわ)」
「全部飲み込んでみろ」
ブバッ
ドロ〜…
「んぐっ！(絡み付いて飲みづらいじゃない)」
「味はどうだ？」
「変わっているけど嫌いではないです 癖になるというか…」

「今日でようやく補習も終わりね」
「補習が始まってから散々な目にあったわよね」
ゴトン
ゴトン
「体調は変になるしおかしな夢は見るし」
「まぁでもいいわ火照りはまだ残っているけれど変な夢は見なくなったし」
（でもアナルでオナニーするのが癖になってしまって…困ったわこんな事絶対に……！）
（気のせい？さっきからお尻に手が……）

『いいお尻だねぇ』
（！ち、痴漢!?）
『この辺の手触りが実にいい』
さわ
ぶるっ
「はひっ！」
「おや、気持ち良かったかね」
（この変態！取り押さえて…でももうすぐ駅よ変に騒ぎになるよりは少し我慢した方がいいかしら…）
「ふふ…ではそろそろ…」

「あひいっ！」
『中もいいねぇ』
（う、ウソでしょ！パンツの中!?）
『ここはどうかな？』
「ほひいっ！（アナルぅっ！）」
「この反応、ひょっとして自分でここを弄ってるのかな これはとんでもない変態さんだったようだね」
ぐぃっ
ぐぐぐ
（な、何ですってぇ!!）
「普通はこっちの穴でこんなに感じないからなぁ」
（くひっ！じ、自分でしてるけど！私はっ！変態じゃないわよっ！治療で仕方なくっ！）
「ふふ、気持ちいいだろう？」
なぁぁ
「だ、誰が！いい加減にしなさい！この人痴漢よ！捕まえて！」

『痴漢？それはいけないなぁ』
ーガッ
「な!?」
「ちょ、ちょっと！私を捕まえてどうするのよ!!」
「お尻でオナニーなんて君の方が変態だからねぇ」
「そ、それは治療で仕方なく！」
『なら我々も治療に協力しよう』
「何なのよあなた達！いい加減に！！…あっ！」

ーバッ
『な！何をするのよ！』
（こんな所で！）
「ふふ、見られて興奮しているのかな？」
「そんな訳ないでしょう！私はそんな変態じゃないわ！」
「でも乳首は立っているみたいだね」
「くっ！」

「そんなにアナルがよかったのかい？」
「だ、誰が！気持ち良くなんて！」
「これはどうかな」
ーグイッ
「あはあっ！らめえっ！ひっぱらないでぇ！」
ーぐりぐり
「ひいいっ！だめっ！乳首は駄目よっ！」
はあぁ
トリィィィ
くりくりくりくりッッ

「オマンコの方はどうかな？」
ーグチャ
ーグチャ
「はひっ！そ、そこは止めて！駄目よ！駄目！だっ！ひいっ！」
「さあ、痴漢されてイけ五更」
「イグッ！イグッ！うひいっ!!痴漢されていぐうーーっ!!!」
ビクッ
ビクッ
ビクッ

「離して！離しなさい！」
「暴れても無駄だ」
グルグル
「くうっ！」
「こいつでお前の処女を奪ってやろう」
「な!?や、止めなさい!!絶対に嫌よそんなの！わ、私は好きな人が!!」
くうう

「いっ！嫌ぁぁぁーーっ!!
痛っ！痛い！抜いてえっ!!」
ズニュ
あぁぁ
ーズンッ
「いひいいいっ!!!」
ーズンッ
ーズンッ
「あっひゃひいっーーっ!!
だっ駄目！止めなさひいっ!!」

「くく、犯されて感じているようだな」
「そんな事なひわよおっ!!」
ずぽ、ずぽ、
ぐりぐりぐりぐりっ
「口も使わせてもらうぞ」
メキッ
「むごっおっ!!ふぐうっ!!やべでえっ!もごおっ!!」

（んひいっ！あひいっ！ひひいっ！何で!?犯されているに気持ちいいのおっ！）
「そろそろ出すぞ、五更！」
ドクッ
ドクッ
「!?」
「んぶうっ!!（中で出す気！駄目よ！妊娠しちゃ！）」
「ぼぼおうっ!!（いっやぁあぁあっ!!赤ちゃんできちゃうーーーっ!!）」
ぶしゅあぁぁ

「くく、どうだ五更
気持ち良かったか？」
「ヴうえええっ！」
ーゴボ
ドロォ…
うう…
「うう…なんでぇ…
犯されたのにぃ…
なんれきもひいのぉ…」
「何度も言っているだろう
お前が変態だからだよ」
コポッ
「わたひが…へんらい…わらひが…」

「中は駄目よ！赤ちゃん出来ちゃうーーーっ!!」

ーガタンッ

「くく、いい仕上がり具合だ」

「はっ!?わ、私また夢を!!」

「いい夢は見れたか五更」

!?

「せ、先生!?違うんです！こ、これはその！あの！」

「何も違わないだろう痴漢に犯されて何度も絶頂に達したんだろう？」

「え!?な、何で!!」

ガシッ

「調教の仕上げといこうか」

「ち、調教!?何を言っているの！」

「五更、マンコとアナルを見せてみろ」

「!?な、何をバカな!!」
グイッ
「え!?え!?え!?」
(な、何!?私何をしてるの!?)
『くく、丸見えだぞ』
プル
プル
プル
ヤッ
「いやぁっーっ!!見ないで頂戴!!」
「アナルがヒクヒクしているな全くお前は本当に変態だよ」
「な、何ですって!!誰が変態よ!!」
「お前の事だよ五更ほら、大好きなアナルを弄ってやろう」

おほぉッ♡
ーグチュ
「ほひいいいっ!!!」
ーグチュ
ーグチュ
「はひやあああっ!!」
グチュ
グチュ
『変態でなければこんなにアナルで感じたりしないぞ」
ビクッ
「う、うるさいわね!! あなた教師の癖にこんな事をして恥ずかしくないの!」
「教師は副業でな本業は調教師だよ」
「ちょ! 調教師!?」
『お前を淫乱な雌ブタに変えるのが仕事さ」
「何でそんな事を!!」
「それは直ぐにわかる、調教が終わればなさぁ五更、自分を変態だと認めるんだそうすればアナルでイカせてやろう」

「ふざけないで！誰が…」
ーぐりゅんっ
「おほおっ!!」
「さぁどうする？」
「うぅ…」
（アナルが疼いてが、我慢できないわ）
「…イ…て…頂戴…」
ぐりゅんッ
ぐりゅんッ
イクッ♡
イクッ♡
「んん？聞こえないな」
「く…（悔しい
どうしてこんな）」
「ハッキリ言うんだ五更」
ーグリッ
ーグリッ
「ほひぃっ!!わ、かったわよ!!
言う！言うわ!!私は変態!!
アナルで感じる変態よ!!
だからイカせてえっ!!」
「おおおおおーーーっ!!
イグッ！イグッーっ!!
アナル弄られてェ！
イッッグゥウーーッ!!」
ーグリグリグリグリ
ビクンッ
ビクンッ
ビクンッ
ビクンッ

あぁぁぁぁッ
「ふぁぁぁぁぁぁ……」
ープシァァァァァ
「ひぅぅぅ…ひもひいい……」
ビクッ
ビクッ
ビクッ
ポンプァァァァァ
「派手にイッタな」
「ふぁはぁぁ…」
「これで調教は終わりだ
お嬢様に早速連絡するか」

『う…ん…！』
『あ！え⁉わ、私一体…何処よここ…』
（知らない部屋…それに何よこれ…）
『コスプレしてるじゃないの…バニーガール？じゃないわね、キャットガール？かしらね』
『一体何なの？私確か…えーと…補習を受けて…それで…！』
『ええっ⁉せっ先輩‼』
『ぐう…ぐう…むにゃ…』
『な、何なのこれは？知らない部屋でコスプレをして横には先輩が全裸で寝ていて…』
『全く意味が分からないわ…意味が分からないけれど…ゴク』

「はぁ…はぁ…」
（な、何よ…興奮しているの私？
先輩のあ、あれを見て興奮する
なんてい、イヤらしいわね）
「で、でも折角だし…
ちょっとだけなら…」
（な、何考えているのよ!!
先輩が起きたらどうするの！
今は気持ちよ出そうに夢を
見ているからいいけど…夢？）
「夢…じゃないかしらこれ
今までも変なイヤらしい夢を
見てきたじゃないの…そうよ！
これも夢よ！だ、だったら…」
「少しだけ…少しだけなら…」
ドキドキ
ドキ

ーグニッ
「んむっ！」
「こ、こんな感じかしらね」
ーしゅっ！
ーしゅっ！
『おっ！うっ！』
「ふっ！ふふ！
き、気持ちいいみたいね」
ーしゅっ！
ーしゅっ！
「手コキって言うのよねこれ
でも何故かしら、何となく
やり慣れている気が…」
しゅ
しゅ
しゅ

「あっ！くっ！だ、駄目だ！」
「クスクス、あらどうしたのかしら先輩
そんな苦しそうな声を出したりして」
「くうっ！も！もうっ！」
「もう何！出そうなのね！
いいわ！出しなさい人間！」
「だ、駄目だ黒猫！
中でなんて！」
「あらあら、夢で私としているのね
嬉しいわ、でも無理は体に毒よ先輩」
ーグリッ
「おおうっ!!」
ードピュッ
「あは！出たわね！やっぱり
男の人も乳首が弱いのね！」
ドビャッ
キャッ
ぐり
あああッ

「ふぅ…ぅ…ぅ…」
「ふふ、すっごい出たわね
でも勿体ないわよね」
ーぢゅるるるるっ
ドロォ…
ぢゅるるるる〜♡
「おっ！おっ！おぉっ！」
「まだまだ休ませないわよ
お楽しみはこれからだわ」
「う…あぁ…」
（どうせ夢なんだから
楽しめばいいのよ
触手や痴漢なんて
嫌だけれど先輩なら）

「う…ん…」
「ふ、ふふ…それじゃいよいよ本番ね」
ふる
は！
は！
ふる
「ここかしら？」
「おっ」
「あっ！んっ！」
ーググ
「も、もう少し…んっ！さ、先っぽが入ったわ！」
「んぅ…」
ふる
ふる
グリグリ

ーズボッ
「おっほおおおおお
おーーーーーッ♡」
おほぉッ♡
「は、入ったわ！痛い！
けど…気持ちいい！
凄くいいわよこれっ！」
「うぅ…っ！な、何だ!?」
「あら今頃お目覚め？」
「く、黒猫！何やっんだよ！」
「見ての通り
契りを結んだのよ」
ズボッッ

「な！何でこんな！」
「あああもう！うるさいわね！夢なんだから楽しみなさいよ！」
「夢？黒猫、お前何を言って!?」
アッ♡
おッ
「動くわよ！」
「ちょ、ちょっとま！」
ーじゅぽっ
ーじゅぽっ
「あひっ！おふっ！ひいっ！すごっ！これすごいのおっ！」
オォッ♡
「うぅっ！あっ！だ、駄目だ！黒猫！中でだしちまうよっ！」
「いいわよっ！中出しして頂戴！思いっきり私の中に出しなさい!!」
じゅぽ、
ずぽ、
じゅぽ、
ずぽ、

「ま、待て！そんな事したら！」
「ああっ！イキそう！もうすぐイキそうよ京介！」
ガク
ガク
イクッ♡イクッ♡
「黒猫！駄目だ！もう我慢が！」
「我慢なんてしなくていいのよ！思いっきり中でぶちまけて頂戴!!」
ガク
「そ、そんな事はっ！」
「ああっ！イクッ！イクッ！先輩のチンポでイッちゃうううううーーーーーーーーっ♡」
ビクンッ

「うぅ――――っ！我慢っ！」
「あっはぁぁぁぁぁあっ――――――っ♡
きもひいぃ――――っ！……！あれ!?」
「ちょ、ちょっと！
何で出さないのよ！」
ぐぎぎ
「で、出来るわけないだろ！
子供ができちまうだろうが！」
「夢の中で何を
心配しているのよ！
さっさと中出し
しなさい人間め！」
ーぐりゅん
ーぐりゅん
「おっおおうっ！やっ止めろ黒猫！」
「ふふ、楽しんでいるようですなぁ」
「！あなた…」
ぐりゅんッ
ぐりゅんッ
ぐりゅんッ

『沙織じゃないの、あなたまで私の夢に出てきたのね』
『ふふ、黒猫氏これは夢ではござらん』
『何を言っているの？こんな状況夢以外ありえないわよ』
『普通ならそうでござろうなぁ』
『沙織…そ、そういえば俺お前に呼び出されて…』
『ふふ、お二人とも大分混乱しておられる様子無理もありませんがこれは全て拙者の計画なのでござるよ京介ハーレム計画と言った所でござろうか』
『ハーレム計画!?』
『な、何よそれ』
『全ては我がサークルの為…』

「これからもサークルを維持していく為には京介氏を中心としたハーレムにしてしまうのが一番だと思ったのでござるよ」
「そういえばそんな話をさっき聞いたようなお前本気だったのか!?」
「あ、あなた正気？やっぱり夢よこれ」
「ふふ、黒猫氏がそう思っても仕方ないでござる補習の間、ずっと催眠調教を受けてきたのでござるからな…」
「さ、催眠調教？」
「催淫剤という特殊な媚薬を用いるものでござる色々とおかしな夢を見たでござろう」
「う、嘘…あ…え？」
「精神的に快楽付けにして変態の雌ブタ…ならぬ雌猫に変える調教を施させたのでござる利点は処女のまま淫乱な雌猫に変えられる事でござってな現実の処女喪失はどうでござったかな黒猫氏？」

「いっ！いやぁぁぁっ!!」

「く、黒猫！」

「嘘よ！これは夢！これは夢なのよ！」

「何をそんなに慌てているのでござるか？京介氏に処女をささげたのだから本望でござろう？」

「そ、それは！」

「京介氏が納得して頂ければきりりん氏の調教にもすぐに入るでござる」

「ハ、ハーレムなんてそんなの無理だ」

「大丈夫でござるよ、拙者の財力や人脈を使えば問題ないでござるあとは京介氏が受け入れてくれればいいだけなのでござるよ」

「そ、そんな事…」

「だ、駄目よ先輩!!こんな事間違っているわ!!」

「さて京介氏、答えを聞かせて貰うでござる」
「黒猫の言う通りハーレムなんて…」
「ではきりりん氏に彼氏が出来てもいいでござるか？」
「う…そ、それは…」
「黒猫氏もきりりん氏に遠慮してちゃんと付き合えないではござらんか」
「わ、私には色々と計画があって」
「まどろっこしいので拙者の計画を進めさせて貰ったでござる さぁ京介氏、拙者に賛同するのなら黒猫氏を犯すでござるよ」
「何ですって!?」
「黒猫氏は既に犯されて喜ぶ雌猫 京介氏専用の肉便器でござる」
「だ、誰が肉便器よ！」
「黒猫氏はずるいでござるなぁ 自分だけイってしまって… 京介氏もイきたいでござろう？」
「う…うぅ…く、黒猫っ!!」

「黒猫っ！お、俺はもう!!!」
「止めて先輩！こんな事しなくても私は先輩の事がっ！だから止めて頂戴！普通がいいのよ！」
「く、黒猫…」
「わ、私はあなたと普通の恋人同士になってからしたいのよ…だから…」
くぅッ
「…わかったよ黒猫沙織、やっぱり俺は…」
「京介氏も頑固でござるなぁ」
「い、いい加減にしなさい沙織私たちはこんな事望んでないわ!!」
「それではこれをご覧いただくでござる」
ドサッ

『あぁっ！いいいっ！オマンコいいのおっ！』

「こ、これは！」

「あぁ・・あ・・」

「どうですかな？これでもまだ我慢しますかな京介氏？」

『いいわ京介！そこよ！私の中に思いっきりあなたのチンポを入れて頂戴！きもひいいっ♡』

「く、黒猫・・・お前・・」

「ち、違うの！これは！」

「黒猫氏は毎日京介氏をオカズにオナニーしまくりでしたなぁ」

「いやぁぁぁーっ！もう止めて頂戴っ！お願い見ないで！こんなの見ないでぇ！」

ビクン
カ、は、
おっぽ
「黒猫おっ!!」
「だ、駄目よ！せっ!?」
ーズボッ
「おぉっ！」
「おっおしりひい
っーーーッ!!!」
「腰を動かすからアナルの
方に入ってしまいましたな
でも黒猫氏はアナルの方が
良かったでござるかな？」
「しょっ！しょんな事
なひいわよぉーーっ!!」
「これでアナルの処女も
奪われた訳でござるな
黒猫氏のアナルの具合は
どうでござるかな京介氏」
「あぁ、スゲー締めつけてくる
前の方とはまた違った感じだ」
「うひいっ！ぬ、ぬひてえっ！
らめえっ！らめなのよっ！
アナルだけはあっ!!!」
ズボッッ

ぶる
ぶる
ぶる
あずあず
「ぬっぬひてえっ！」
「痛いのですかな？」
「いっ痛くはないわ！ないのだけれどっ！」
「ふふ、京介氏抜いてあげてください」
ぶる
「あ、ああ…」
ーずるるるるぅ
ぶる
「お!?お!?おおおおーーーーっ!!!」
『すげぇ…きつくて…それに絡みついて…』
「アナルからチンポを引き抜かれる感覚はどうでござるかな？」
ずゅるるるる、
ぶる
「しゅっ！しゅごひいいっ！夢よりも全然しゅごひっ！駄目よっ！これはダメエッ癖になるわっ！生のチンポが癖になっちゃうわよおっ!!」

あぁッ♡
ビクッ♡
「あひいっ！しゅごひいっ！」
「どうだ黒猫！気持ちいいか！」
「いいわ！気持ちいい！でも駄目よ！お尻で感じるなんて！ああっ！」
「それでいいでござる黒猫氏は京介氏専用の肉奴隷ですからなぁ」
「はひいっ！ほおうっ！そんなっ！駄目よおっ！私たちはっ！普通の恋人っ！同士にひいっ！」
「黒猫氏も頑固でござるな京介氏、思いっきりガンガン付きまくるでござるよ」
「おおっ！」
ーぢゅぽっ
ーぢゅぽっ
「うひいいいいいいいーーーっ!!そ、そこらめえっ！めくれるうっ！お尻とけちゃうううーーーっ!!!」
じゅぽ、
ぢゅぽ、
じゅぽ、

ビクッ
イッ
イッ
クッ
あ
あ
あ
あ
あ
「くっ！もう限界だ！中で出すぞ黒猫!!」
「だっ駄目よ！中は駄目！」
「アナルだから出しても大丈夫ですぞ黒猫氏」
「そっ！そう言う問題じゃ！」
「おおっ！出るっ！」
ードプッ
「あっ!?」
「くうっ！まだ出る！」
ドクッ
「はひいっーーーーっ!!でてるうっ！中でえ！おひりの中にザーメンいっぱいでてるうーっ!!」

「初めての中出しはどうで」ざったかな？」
「あぁ…あ…あ…」
「ふふ、大分良かったようでござるなぁ」
「うぅ…おね…が…もぅ…や…」
「黒猫氏はまだまだ満足しておられない様子どうしますかな京介氏？」
「俺はまだまだイケるぜ」
「では拙者も参加するでありますかな」
プル
プル
プル
プル
は！
は！
ドロォ…

「あひっ！な、なひをするのよっ！」
「さっきはこっちで中出し出来なかったからな仕切り直しだよ黒猫」
「ら、らめよ！そっちでの中出しは…」
ぶる
「じゃあまたアナルがいいのか？」
ーくちゃ
ーくちゃ
くちゃ
くちゃ
ぶる
ぶる
「ひいっ！や、やめっ！お、お尻は駄目！さっきの熱がまだ引いてないのよ！」
「それじゃマンコでいいな」
「そ、それも駄目っ！避妊！せめて避妊して！ゴムを！」
ぶる
「もう我慢できねぇ！行くぞ黒猫！」

ーズンッ

「おっほおおおおーーッ!!!
生チンポきたぁーーッ!!!」

「どうだ黒猫！
俺のチンポは！」

「いいひいいーーッ!!
しえんパイのチンポ
しゅごひいーーッ!!!」

ルンッ

ズンッ

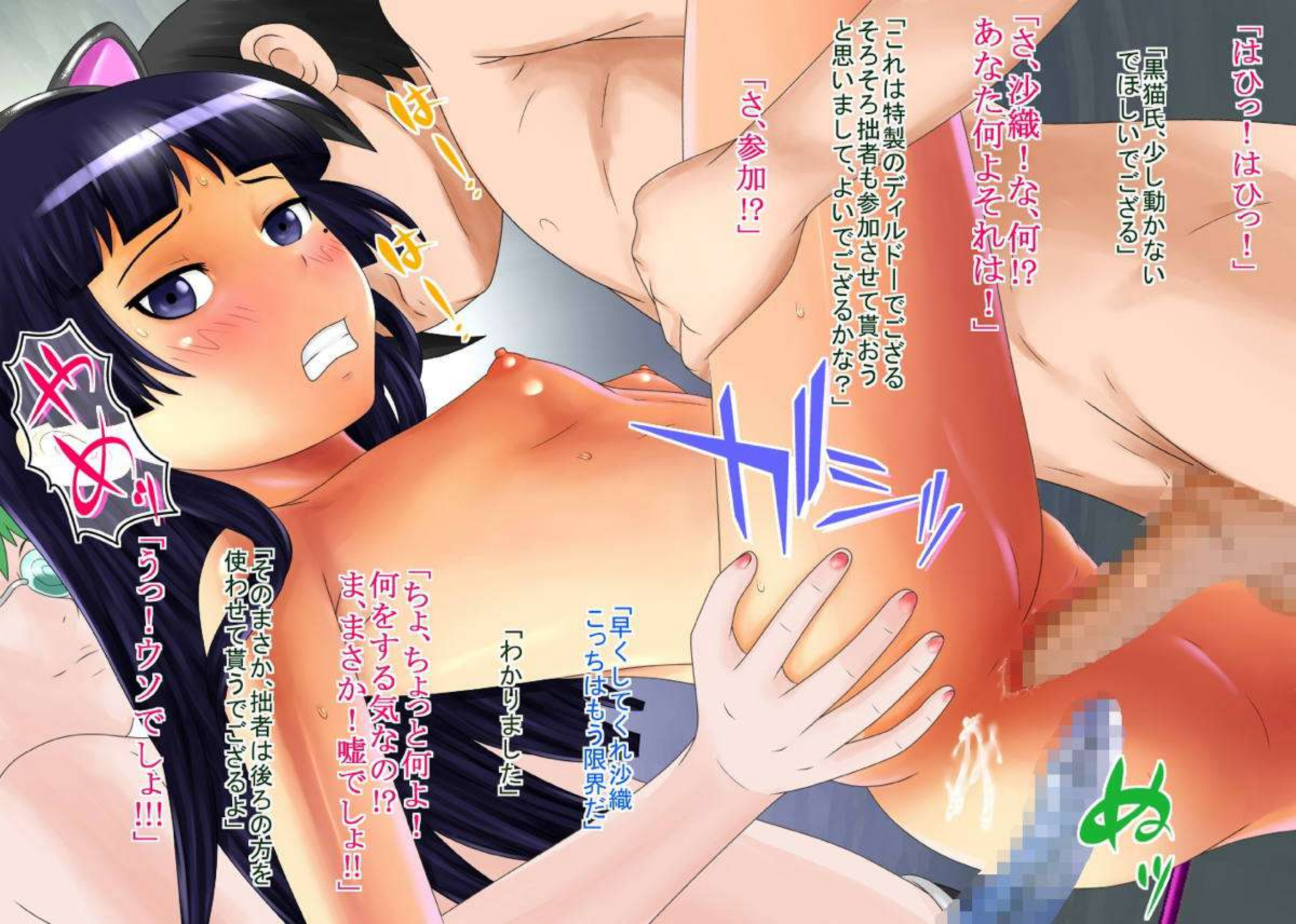
ビクッ

「お前のマンコも気持ちいいぞ
暖かくてヌルヌルしていて」

「しょ、しょんな
恥ずかひいこと
言わなひで頂戴っ！
嬉ひいけど！
嬉ひいけど！
駄目だからあっ!!」

「楽しんでおられる様で
何よりです黒猫氏」

「さ、沙織…」


「はひっ！はひっ！」
「黒猫氏、少し動かないでほしいでござる」
「さ、沙織！な、何!?あなた何よそれは！」
「これは特製のディルドーでござるそろそろ拙者も参加させて貰おうと思いまして、よいでござるかな？」
「さ、参加!?」
ガシッ
は！
は！
やめ
「早くしてくれ沙織こっちはもう限界だ」
「わかりました」
「ちょ、ちょっと何よ！何をする気なの!?ま、まさか！嘘でしょ!!」
「そのまさか、拙者は後ろの方を使わせて貰うでござるよ」
「うっ！ウソでしょ!!!」
ぬッ

「だ、駄目！駄目！駄目！
絶対駄目よおっ！そんな！
前と後ろ同時なんてえっ!!
言ったでしょ！アナルは
まだ引いてないのよおっ！
だから今入れられたら！」

「では行きますぞ！」

「来いッ！沙織！」

ーぐりゅんっ

ビクン

ぐりゅん

ビクン

「うひいいいいッ!!!
おひいりにも来たあっ!!
らめって言ったのにいっ！
アナルに来ちゃったあっ!!!」

「うおっ！これはキツっ！」

「このディルドーは特別製で
精液も出せるのですぞ
先ほど京介氏から採取した
ものが溜めこまれている
のでイク瞬間によく
味わって欲しいでござる」

《いつの間に…》

ビクン

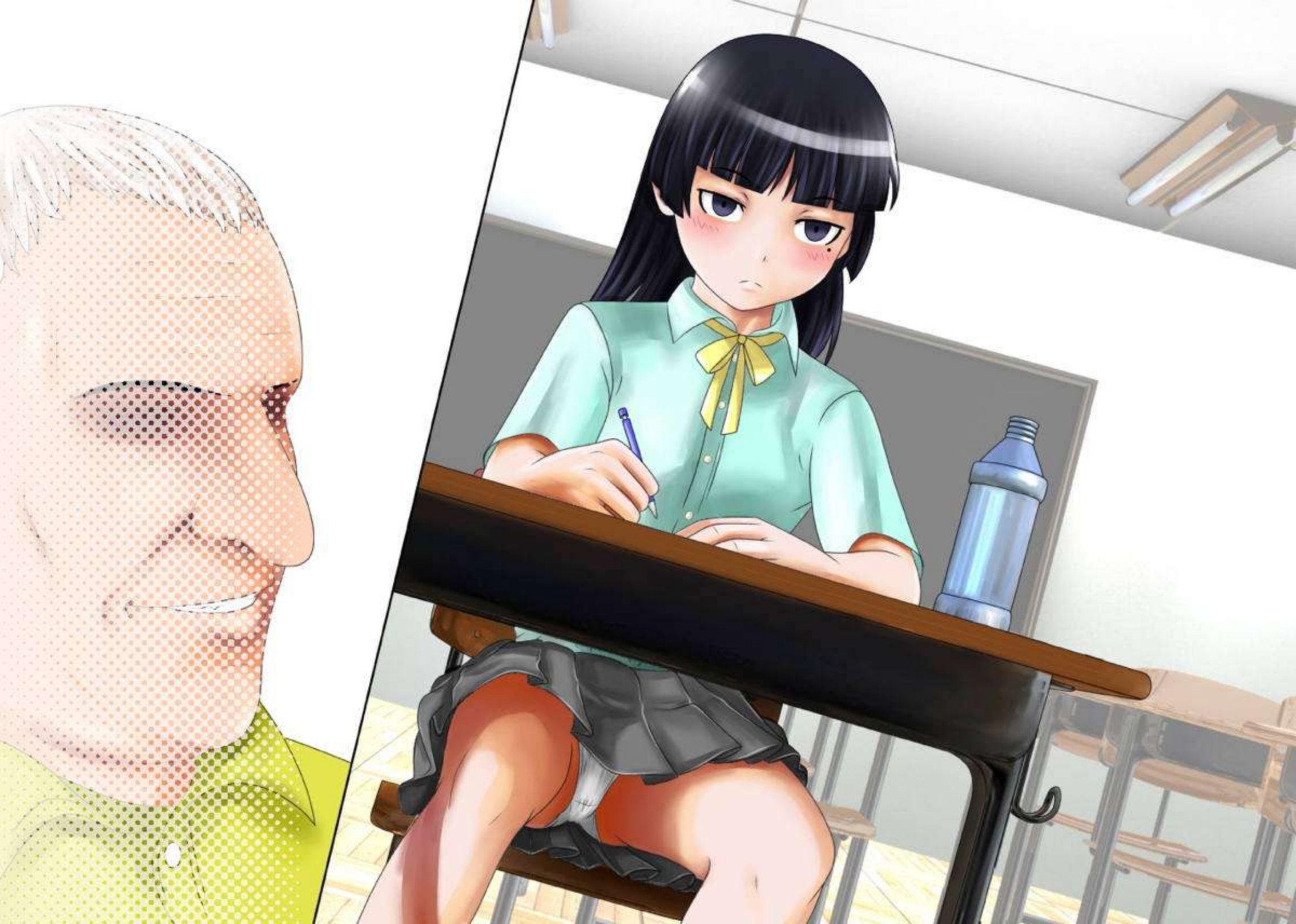
ビクン

「しょ、しょんなあっ!!」

「動くぞ！」
「ええ」
「はひぃっ！待って！入れられただけで軽くイッたのよ！だからまだ…」
ーじゅぽっ
ーじゅぽっ
「おっ!?おおっ!?おおおおおっ!?」
ぎゅぽ じゅぽ ぎゅぽ じゅぽ ぎゅぽ じゅぽ
「くうっ！すげぇキツさだぜ!!」
「どうでござるか黒猫氏！前と後ろを同時に責められる感覚は！」
「しゅ！しゅごひのよおっ！ゴリゴリ奥まで届いてえっ！戻れなくなるわよーーっ!!両穴犯されて同時にイッたらもう戻れなくなるうっ!!」
「くっ！もうイキそうだ！」
しゅごぉ
ひゃっ♡
イッ♡

「ま、待ってぇ！中はぁッ！中で出されたらおかしくなっちゃうからぁーーっ!!」
「ふふ、黒猫氏は京介氏の肉奴隷だからそれでいいのでござるよ」
「だ、駄目！わたひはぁっ!!しぇんぱいとおっ！普通の恋人同士にいっ！あひいっ!!マンコとアナルがすごっ!!すごいいっ！二穴アクメがきちゃ！そえは駄目えっ!!」
ビクンッ
ビチャッ
ビチャッ
「イクぞ！黒猫！中で受けとめろ!!」
ードプッ
「っ!?きっきっったぁーーーッ!!!イイイッイグゥッ！イグッ!!マンコがイグゥッーーーー!!!奥の方がザーメンで叩かれてしゅごすぎぃーーーーーッ!!!!」
「では拙者も！」
ードビャッ
「おっほぅーーーーーーッ!!!アナルにも来たぁーーッ!!熱いのがぁっ：凄い来たっ!!堕ちるぅっ！わたひもうっ!!堕ちるぅっ！肉奴隷にいっ!!落ちちゃったぁーーーっ!!!!」

「うぅ…うぅ…しゅごぃ…こんらの…まだぁぁ…あたまが…真っ白でぇ…」
「ふふ、黒猫氏も満足した様子ではちゃんと宣言してもらうとするでござるかな…」
プル
「はぁ…はぁ…せ、宣言？」
「京介氏の肉奴隷になると言う宣言でござるよ」
「そ、それは！」
プル
ドロォ
「先ほど肉奴隷になると言ったではござらんか」
「う…うぅ…そ…れは…」
プル
「ではハッキリ宣言して貰うでござる」
「む、無理よ！さっきのはその…頭が真っ白になってそれでその…つい…だから」
「そうでござるか…では」

ーぐりゅっ
「おっひいっひいーーーーっ!?」
「もうすこしここを苛めないと駄目でござるかな?」
「あひゃっ!ひゃあっ!らめてえっ!ええええっ!子宮は!子宮だめっ!まだ波が引いてない!引いてないのよおっ!」
ぐりゅッッ
ぐりゅッッ
ビュルルルッ
「お、おい沙織あまり無茶は…」
「大丈夫でござるよ黒猫氏のだらしないアヘ顔を見るでござる、この苦しみも黒猫氏にとっては快楽でござる」
「はひいっ!はひいっ!」
(御免なさいでも我慢して下さいこれもあなたの幸せの為そして私のサークルの為)
「わ、わかったわ…言うわよに、肉…隷に…なるわ…こ、これで…いいでしょ…」

「駄目でござるな もっとはっきりと ついでにピース しながら笑顔で 言うでござる」
「そ、そんな！」
「黒猫…いや瑠璃 今更だが俺はお前を 失いたくない どんな形でもお前と 一緒にいたいんだ」
「せ、先輩……」
「俺の俺だけの 雌猫になれ」
「わか…りました (京介…あなたと 堕ちるのなら…)」
「黒猫は今日から ご主人様だけの 雌猫になります!!! 一生可愛がって くださいいっ!!!」
「ああ、一生可愛 がってやるぞ」
「あは…お願いします ご主人様……」
ゴポッ
ゴポッ
セク
セク
セク
はぁ…
はぁ…
セク
フッ…